

シリーズ「GSJ 筑波移転」を振り返って

小松原純子¹⁾

1979年に通産省工業技術院地質調査所が筑波に移転してから今年で40年になります。GSJ地質ニュースの前身である地質ニュースには、その当時、移転に関する様々な計画や新庁舎の記事が数多く掲載されていました。40年たって振り返ってみたときに筑波移転はどのようなイベントであったのか、当時の記事に対応するものとしてこの「GSJ筑波移転」のシリーズは始まりました(GSJ地質ニュース編集委員会, 2018)。移転を経験した計7名の(元)職員の方々に当時のことを思い出していただき、移転前の不安や期待は実際のところどうだったか、その後のGSJにどのような影響をあたえたかという視点から、当事者の言葉で語っていただきました。記事は2018年4月から計9回にわたって、インタビューもしくは依頼原稿という形で掲載されました。

第1回は地質調査所の新庁舎(現在のつくば中央第七事業所)の設計に関わった松井和典さんにお話を聞きました(小松原・岡井, 2018)。第七事業所には移転当時から地質試料の保管を目的とした建物が存在し、研究本館は廊下と居室の壁がすべて収納になっていて、またそれらの収

納はすべて統一規格の持ち運び可能なスチール製の引き出しに対応しています(第1図)。試料の収納に関して相当に配慮された建物であることは以前から気になっていましたが、松井さんにお話をうかがって、試料の整理・収納が移転時の重要課題となっていたことを知りました。記事では割愛しましたが、当時試錐部というボーリング調査を専門に行う部署があり、新庁舎の周辺で自前でボーリング調査を行ったエピソードなどもうかがいました。

第2回は地質調査所資料室の若手職員として移転を経験された菅原義明さんに資料室の移転について執筆していただきました(菅原ほか, 2018)。実はこのシリーズを企画するきっかけのひとつが2017年に菅原さんがGSJを定年退職された際の退職の挨拶でした。筑波への移転を挟んだ資料室の歴史についてお話しされたのが大変印象深く、もっと移転当時のことを知る必要があると思ったのです。執筆を依頼したところ、当時の係長であった本荘時江さんと曾屋真紀子さんにもお声がけいただき、3名の共著で書いていただきました。移転により書架がスタックランナーになり、地質図・地形図等マップ類の専用の棚ができ、資料室の業務体制も刷新されるなど、この時期の大きな変



第1図 岩石試料を収納するため統一規格の引き出し。現在も使われている。

1) 産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門

キーワード：筑波移転、まとめ

化を経て現在のGSJの資料室があるのだということがわかりました。GSJの資料室は日本の地質に関するほぼすべての文献にアクセスすることができ、我々は日々その恩恵にあずかっていますが、その歴史を知ることになりました。特に当時の文献検索のしかたが衝撃的です。

第3回と第6回は筑波移転が決定した頃に全商工労働組合関信支部委員長だった坂巻幸雄さんにエッセイを書いていただきました(坂巻, 2018, 2019)。第1回でインタビューした松井さんに、体制側ではない話なら坂巻さんに聞くとよい、とうかがったためです。交通至便な都心から開発されたばかりの筑波学園都市に職場が引っ越したことにより職員の生活は激変したわけですが、そのあたりのことをユーモアと若干の皮肉を交えて第3回に書いていただきました。第6回は移転前の庁舎一本化の要望と、それが筑波移転により別の形で実現していく過程の話などです。当時のことについては、例えば組織としての歴史は「地質調査所百年史」(地質調査所百年史編集委員会, 1982)、組合の視点からは「大地に刻む」(地質調査所分会25年史編集委員会, 1976)などに詳細な記録がありますが、この2回にわたる坂巻さんの文章は短く簡潔ながらも両方を結びつけて理解する助けになると感じました。

地質調査所の筑波移転に先立って1974年に海洋地質部が新設され、移転時に海洋実験棟ができ(第2図)、この時期にGSJの海洋地質分野は大きく発展しました。第4回はこの海洋地質部の発足時メンバーとなった湯浅真人さんにお話をうかがいました(小松原, 2019a)。筑波移転は研究環境の大幅な改善という点で追い風にはなったようですが、それよりもむしろ日本全体の海洋地質分野の盛り上がりが大きかったようです。入所してすぐ1枚だけ担当した山岳地帯の図幅が小笠原海域の大きなプロジェクトにつながっていったという話は、いろいろなことが結びついて研究が発展していくおもしろさを感じました。同じく海洋地質部OBの西村 昭さんと岸本清行さんのお二人に事実確認や写真提供など多大なご協力をいただき、第4回の記事はシリーズ中で最も長い7ページになりました。

移転前、地質調査所は新宿区河田町と川崎市溝口の2カ所に庁舎が分かれていて大変不便だったというのは、松井さん、坂巻さんのお話でも出てきたところですが、その不便さを最も感じていたのがいわゆる事務方の職員だったのだと思います。第5回は長年事務方としてGSJを支えてきた渡邊頼子さんにインタビューを行い、そのあたりを含めてお話をうかがいました(小松原, 2019b)。確かに庁舎がひとつになったことで職員の顔が把握できるようになったり、書類が東京と神奈川を行き来しなくてすむよう

になったというメリットがあったそうです。その一方で他の研究所と敷地が一緒になったためにGSJの特殊性に気づいたという話が印象的でした。当時は守衛や所長車の運転手、電話交換手といった人々が職員として地質調査所に勤務していたとのお話に時代を感じました(第3図)。収納に配慮した新庁舎の厚い壁は、一方で廊下の採光に難があり一部に不評だったということも、お話を聞いて初めてわかりました。

第7回は酒井 彰さんに労働組合の話、および特定地質図幅についてお聞きしました(小松原, 2019c)。移転によって研究所の組合活動は大きく変わったはずですが、組合の歴史は公的な記録にはなかなか残っておらず、組合員以外には伝わりにくいことであると思います。酒井さんによれば、移転前は首都圏のあちこちに各省庁の研究機関が点在していたのが、筑波に移転して一緒になった結果、研究機関に共通する課題をまとめやすくなった、よその研究機関の情報が日常的に入ってくることで視野が広がったなど、おおむね移転は良い影響をもたらしたということでした。



第2図 完成当時(上)および2018年現在(下)の第七事業所本館と海洋実験棟。手前に建物ができ、本館には耐震補強が增设された。その向こうには第一事業所の建物も見える。



第3図 現在も第七事業所北側入口にある守衛所の跡。

た。むしろ2000年の独法化が与えた影響のほうが大きいとかがいました。もう一方の話である特定地質図幅とは、地震防災の観点で指定された全国10の地域の地質図幅のことで、これらの図幅作成のために予算と人員を集中して、移転の年にプロジェクトが始まりました。プロジェクトの開始と移転の时期的な一致は偶然ということですが、移転翌年に地質調査所の採用数が大幅に増加したという点は移転と特定図幅の両方に関係があるということがわかりました。数年前に定年退職者が急に増えたと感じたのは、この時期に採用された職員が退職の時期を迎えたためでした。

最後の第8回、第9回はGSJ代表および産総研理事を務められた加藤碩一さんに極私的随想を書いていただきました(加藤, 2019a, b)。軽快な筆致で、移転にまつわる細かなできごとや役人の仕事の実態が、少々きわどい話も含めて描写されています。特に、工業技術院の中における地質調査所の独特な立場に関して、二号業務、筑波手当というキーワードを使って当時どのような議論がされていたのかについても書かれています。詳細は2回にわたる加藤さんの随想を読んでいただくとして、GSJの特殊性に関する議論は独法化後の現在でもくり返し浮上するテーマであり、工技院傘下で各研究所が独立していた当時からずっと議論されているということがわかりました。

移転から40年の間にGSJは組織も名称も変わり、今では職員のほとんどが筑波移転をリアルタイムで知らない世代になっています。著者が初めてGSJを訪問したのは2001年秋のことで、すでに地質調査所はなく産総研地質調査総合センターに改組されていました。2005年のつくばエクスプレス開通以降、東京への往復が飛躍的に楽にな



第4図 移転当時(上)および2019年現在(下)の第七事業所。植栽、特に標本館前庭のメタセコイアが著しく生長した。

り、2019年現在では官舎はあちこちで取り壊され、民間の戸建て住宅やマンションに変わりつつあります。

このシリーズを始めた頃に資料室で過去の写真を探しましたが、どの写真を見ても建物の姿が良く見えることが気がつきました。それは敷地内の植栽がすべて小さいからです(第4図)。当時と同じアングルから写真を撮ろうとしても、木の葉に遮られてなにも見えないということがたびたび起こりました。40年という時間の流れをここでも感じました。

インタビューおよび原稿依頼にあたっては、当時のいろいろな立場の方に話をうかがうよう心がけました。可能であれば当時の管理職の方にもお話をお聞きしたかったのですが、残念ながらそれはかないませんでした。

最後に、インタビューに応じてくださった皆様、原稿を執筆いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

文 献

地質調査所百年史編集委員会(1982)地質調査所百年史。地質調査所, 162p.

- 地質調査所分会 25 年史編集委員会 (1976) 大地に刻む - 地質調査所労働組合 25 年史 -. 全商工労働組合関信支部地質調査所分会, 399p.
- GSJ 地質ニュース編集委員会 (2018) シリーズ「GSJ 筑波移転」について. GSJ 地質ニュース, 7, 113-114.
- 加藤碩一 (2019a) 「GSJ 筑波移転」第 8 回 極私的「地質調査所筑波移転」随想. GSJ 地質ニュース, 8, 136-139.
- 加藤碩一 (2019b) 「GSJ 筑波移転」第 9 回 極私的「地質調査所筑波移転」随想 (承前). GSJ 地質ニュース, 8, 196-200.
- 小松原純子 (2019a) 「GSJ 筑波移転」第 4 回 湯浅真人さんインタビュー「海洋地質部の発足と筑波移転」. GSJ 地質ニュース, 8, 20-26.
- 小松原純子 (2019b) 「GSJ 筑波移転」第 5 回 渡邊頼子さんインタビュー「組織運営の実務側から見た筑波移転」. GSJ 地質ニュース, 8, 55-59.
- 小松原純子 (2019c) 「GSJ 筑波移転」第 7 回 酒井 彰さんインタビュー「移転と組合, 特定地質図幅について」. GSJ 地質ニュース, 8, 106-110.
- 小松原純子・岡井貴司 (2018) 「GSJ 筑波移転」第 1 回 松井和典さんインタビュー「地質調査所の施設設計」. GSJ 地質ニュース, 7, 115-117.
- 坂巻幸雄 (2018) 両生類—つくばの小ばなし. GSJ 地質ニュース, 7, 330-331.
- 坂巻幸雄 (2019) 追想—筑波移転と研究体制. GSJ 地質ニュース, 8, 78-80.
- 菅原義明・本莊時江・曾屋真紀子 (2018) 「GSJ 筑波移転」第 2 回 地質調査所資料室 (図書・資料部門) の移転. GSJ 地質ニュース, 7, 214-218.
-
- KOMATSUBARA Junko (2019) GSJ's historical transfer to Tsukuba: Concluding remarks.
-
- (受付: 2019 年 7 月 26 日)